

日伊女性国際会議「女性と社会 - 日本とイタリア」

「第一部 女性の生活：比較と歴史の視点から」に参加して

田崎 聖子

日伊女性国際会議は、日本とイタリアの文化的・社会的・政治的・法的な類似性を出発点とし、両国の女性をめぐる状況についての多角的比較分析を目的としている。本会議第一部「女性の生活：比較と歴史の視点から」では、Chiara SARACENO トリノ大学教授、石井クンツ昌子本学教授、円より子参議院議員の三氏がそれぞれ自らの経験および研究成果を素材としてパネル発表を行った。司会是小谷眞男本学助教授が務めた。

家族社会学を専門とする SARACENO 氏は、イタリアにおける女性の生活について、主に三つの点から紹介された。第一に、ここ 10 年来、女性の就業率が上昇し続けているにもかかわらず、女性管理職の割合が低迷していること。第二に、国内の地域格差、女性間の格差。第三に、社会的基盤の不整備。これらの視点から SARACENO 氏は、イタリアにおいて、女性の自助努力にもかかわらず、既得権を取り巻く男性の壁が依然として高く女性の前に立ちはだかっていると示唆し、改善の要は、男性の意識の改革だと力強く述べた。同じく家族社会学を専門とする石井氏は、日本におけるジェンダー役割について、核家族化・高学歴化・少子化などの具体的な例を挙げながら、男性の意識変化の重要性、家族政策の再検討の必要性、就業形態や収入格差など職場における差別の問題、そして、ワークライフバランスがトップダウン型のアプローチで進められていくことへの限界性を提示した。円氏か

らは、経済政策へもっと目を向けるべきだという提案がなされた。つまり、自身の政治家としての国会内での経験、離婚相談の経験から、女性の生活の改善の要は、経済状況の改善であるということである。政界内の経済・外交・貿易領域での女性の少なさと、教育・家族政策領域における女性の多さについての対照的な状況の報告は示唆的であった。さらに離婚相談の経験からは、ワークライフバランスの有用性をあげ、最後に、格差拡大の悪循環が始まることへの危機感を訴え、その是正を急務とする旨を述べた。

三氏の報告に共通するのは、女性を取り巻く諸問題に対し、経済的基盤の確立をともなったアプローチが必要であるという点である。それは、女性達が懸命に社会進出を図るにもかかわらず、社会的基盤の不整備、地域格差、男性の意識等々がそれを妨げている、すなわち、女性の自助努力を保障する社会的基盤がないという現状の確認であり、それは日本の文脈に即して言うと、1997 年の男女雇用機会均等法改正以来も依然として残る職場での男女格差や、ワークライフバランスのような概念までもが相変わらずトップダウン型で進められることの限界性への疑問提示であった。このような現状をいかに克服していくかということがまさにこれからの我々の課題であり、そのための根本的諸問題を明らかにしたという意味で、本会議は非常に有意義なものであった。

たさき せいこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻